

犬アトピー性皮膚炎—飼主さま向け情報

アトピー性皮膚炎は、環境中の物質に対するアレルギーに関連すると考えられている病気です。「アレルゲン」または「抗原」と呼ばれるこれらの物質には、花粉、植物性または動物性繊維、ハウスダスト、カビがあります。アトピー性皮膚炎（「アトピー」と呼ばれる）の犬はしばしば、特に耳および腋窩をひっかいたり、パッドを舐めたり、顔面をこすり付けるなどの行動を示します。アトピー性皮膚炎は、その他すべてのかゆみの原因を除外した後で下される臨床診断です。

犬が何のアレルギーであるかを判断するには主に2つの方法があります。第1の方法は皮内試験です。犬の胸部片側の被毛を刈り取り、疑わしいアレルゲンをきわめて少量、皮内に注射します。この処置は若干不快ですが、大部分の犬は十分に耐えることができます。犬の協力を得るために精神安定薬が必要になることもあります。獣医師が、注射後半時間以内に様々なアレルゲンへの反応性を評価します。

犬が何のアレルギーであるのかを決定する第2の方法は、各アレルゲンに対する抗体の量を測定する血液検査の評価です。結果は提出後約10日間で得られます。

犬がアトピーと診断されたら、数種類の治療法を試みることができます。第1の方法は、患者の環境から原因アレルゲンを除去することです。これは多くの場合不可能ですが、ウール、パンヤ綿（家具の充填剤）、タバコ、同様のアレルゲンが示唆される場合、検討する必要があります。2つめの治療法は、減感作（抗原特異的免疫療法）、または「アレルギー注射」です。これらの方法では、アレルギーに対する感受性を低下させるよう、希釈アレルゲンを数回注射します。その注射が作用する機序は十分に明らかにされていません。飼主さまは、自宅でその注射を行えるよう訓練を受けることがあります。飼主さまの約60%が、その注射により10ヵ月後に良いことが得られたと報告しています。新しい減感作の方法として、アレルゲンを含有する溶液を、犬の口に1日2回直接「ピュッとかける」というものもあります。舌下薬による免疫療法の予備的結果では、約60～70%の犬が1年後に改善を示したことが明らかにされています。

第3の治療法は薬剤の使用です。抗ヒスタミン薬は使用に限りがありますが、3種類以上の薬剤を対象として、どれか1種類が機能するかどうかを判断するために短期間の試験が推奨されることもあります。一部の脂肪酸サプリメントの補給もアレルギーの犬の症状を緩和する場合があります。獣医療において主に使われているかゆみ止めの薬はコルチゾンか、またはプレドニゾンなどの仲間です。可能性のある副作用を最小限に抑制するために、通常は、有効性を示す最低用量の投与で治療します。経口シクロスポリンは有効であることが示されており、犬の治療に用いるのに適していると考えられます。かかりつけの獣医師が、あなたの愛犬にもっとも適している治療選択肢について、相談に乗ってくれるでしょう。愛犬のかゆみの程度を記録するために、日記をつけるとうりです。

最後に、かゆみや症状の悪化を避けるためには、外用療法と二次感染のコントロールが重要です。定期的な再検査を受けると、適切な薬剤が処方されます。